

# 法華經に於ける願と受持讓与

塩 田 義 遜

## 一、仏教と願

世界の宗教の中基督教を愛の宗教といえ、仏教は願の宗教といえよう。勿論仏教に於ても古來小乗は自度の教、大乘は他度教といわれる如く、一往小乗に対して他度の大乗を以て願と教というべきである。併し自度の小乗教に於ても勿論願の思想がないのではない。仏教は殊に他度を目的とする大乘に於て願が高揚せられたるより、大乘を願の仏教と呼んだのであろう。故に四阿含等の中には、殆んど願の思想は見出されないが、中阿含の四三には『如是比丘願未來也』とも、亦『慎莫念過去、亦勿願未來』(正藏一、六九七)等と、彷彿と自度に立つ願の思想は見えるが、大乘に見ゆる如き他度の願ではない。併し阿含部の中には帝釈所問經には『以願力故証如是果』(全一、〇三五)とも、又央掘摩羅經には『願生彼国』(全二、四四)等の如き、稍積極的の願の思想は見えるが、是等は四阿含等より、余程後に成立した經と思われる。何れにしても小乗の願は大乘に比すれば、同じく願ではあるが自度の願と見做なきければならぬ。

されば如上の小乗の願に対すれば大乘の願は、道行般若の守行品第廿三に

諸未度者悉當度之、諸未脱者悉當脱之、諸恐怖者悉當安之、諸未般泥洹者悉皆當令般泥洹。(全八)

等と見え、法華經の藥草喻品第五には

未<sub>レ</sub>度者令<sub>レ</sub>度、未<sub>レ</sub>解者令<sub>レ</sub>解、未<sub>レ</sub>安者令<sub>レ</sub>安、未<sub>レ</sub>涅槃者令<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>涅槃。

等と見る如く、仏陀の出家が自度に発して他度に進展した様に、大乘に於ては一切の菩薩は皆因位に於ては、必ず右の如き四種の広弘の誓願を起されたのである。されば右の願を古來菩薩の四弘誓願とも亦総願とも呼んで居るが、經に依て多少字句は異なるが誓願の主旨は全く同様である。且つかゝる誓願は菩薩の必須の条件とせられたる故に、大乘が願の仏教と呼ぶるゝ所以である。然らばかくの如き誓願は小乗の中には全く見出せないかといえ、長阿含第八の散陀那經には

瞿曇沙門能說<sub>二</sub>菩提<sub>一</sub>、自能調伏能調<sub>二</sub>伏人<sub>一</sub>、自得<sub>二</sub>止息<sub>一</sub>能止<sub>二</sub>息人<sub>一</sub>、自度<sub>二</sub>彼岸<sub>一</sub>能使<sub>二</sub>入度<sub>一</sub>、自得<sub>二</sub>解脫<sub>一</sub>能解<sub>二</sub>脫人<sub>一</sub>、自得<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>能滅<sub>二</sub>度人<sub>一</sub>。(全一、四九)

等と見ゆる如く、菩薩の四弘の思想は早くも阿含の當時に萌して居たことを知ることが出来る。併し乍ら若し大乘と小乗とを比較すれば、小乗は概ね自利を説き、大乘は専ら利他を説く故に、自利の教たる小乗の行人たる声聞は、仏説を諦聴して四諦の行を修し涅槃を証し、羅漢果を得るのであるが、併しかゝる小乗の自度の四諦が大乘の四弘の基本なることは、本業璣珞經上に

所謂四弘誓、未<sub>レ</sub>度<sub>二</sub>苦諦<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>度<sub>二</sub>苦諦<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>集諦<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>集諦<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>道諦<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>道諦<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>。(全二四、三〇)

等と説かれるに依て明かである。かくの如く小乗自度の四諦の上に、大乘の他度の四弘が説かれたものとすれば、仏

教は小乗にまれ大乘にまれ、度生の四弘を以てその真面目と解すべきと同時に、後世仏教が他度を基調として、大乘として違常の發達を遂げた所以である。

かくてかゝる大乘の願の根本形式としては、上掲の道行般若や藥草品に見る如き所謂四弘誓願であるが、併し今日諸宗一般に行わるゝ、四弘誓願は恐らく心地觀經七の

一切菩薩復有<sub>二</sub>四弘<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>熟有情住<sub>三</sub>持三宝<sub>二</sub>、經<sub>二</sub>大劫海<sub>三</sub>終不<sub>二</sub>退轉<sub>一</sub>。云何為<sub>レ</sub>四、一誓度<sub>二</sub>一切衆生<sub>一</sub>、二者誓斷<sub>二</sub>一切煩惱<sub>一</sub>、三者誓學<sub>二</sub>一切法門<sub>一</sub>、四者誓証<sub>二</sub>一切仏果<sub>一</sub>。(全三、<sub>三三</sub>)

等と見ゆるは、後世の流行の四弘の具体的過程といわなければならぬ。併し後世の所謂四弘は上掲玆路經の四諦の上に説かれたる四弘が、悉く利他なるに對すれば後世の一般の四弘は、最初の一句のみが利他で、後の三句は初一句の利他を成就せんがための、自利の願とも見なければならぬのである。元來四弘は大乘に於ける利他の願なる故に、右の心地觀經の四弘も、後世に於ける一般的四弘も、四句中後の三句は自利であるが、併し後の自利の三句は悉く利他を成就せんがためのもので、畢竟四弘は初句の無辺度生を以て、その目的と解すべきである。

かくの如き四弘は古來より菩薩の總願として、大乘諸宗は悉くこれを採用し、禪宗に於ては六祖の法宝壇經の説に依り

衆生無<sub>二</sub>邊誓願度<sub>一</sub>、煩惱無<sub>二</sub>盡誓願斷<sub>一</sub>、法門無<sub>二</sub>量誓願學<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>上<sub>一</sub>仏道誓願成。(全、四八、<sub>六三</sub>)

と唱へ、天台は第二句の無盡を無數、第三句を無盡誓願知、第四句の仏道を菩提となし。真言に於ては尊勝陀羅尼儀軌等に依て、第二句を福智無<sub>二</sub>邊誓願集<sub>一</sub>、第三句に如來無<sub>二</sub>邊誓願事<sub>一</sub>の一句を加えて五句とし、淨土に於ては往生要集の説に依り、四句に次で更に利他法界同利益、共成極樂成<sub>二</sub>仏道<sub>一</sub>の二句を加えて六句として居るが、孰れも第二句以下の

句は初句の無辺度生のための誓願に外ならないのである。更に大集経には二十大誓願莊嚴を説くが、これとて四弘の敷衍に外ならないのである。

## 二、諸大乘経の別願

大乘諸経に於ては一往四弘は共通の総願と解すべきであるが、併し諸経の中には薬師の十二願、弥陀の三十六願乃至四十八願等に見る如き、総願の外に別願があるのである。これ等は総願を以て満足せずして、更に特殊の諸願を揚げて総願の成就を特殊の形式の上に期したものである。これ薬師の十二願が統命を主眼とし、弥陀の諸願が極楽往生を主眼とするに依て明かである。更に華嚴の十願、般若の三十願等をも見るが、是等は総願の反覆とも解すべき別願であるが、上掲の諸願は特殊の諸願配列の別願と見なければならぬ。

かゝる別願に就て往年木村博士は、大乘仏教思想論に於て般若の六度を六願となし、かゝる六願を基本として、薬師の十二願、阿闍の十八願、平等覚經の弥陀二十四願、般若經の三十願、無量寿莊嚴經の三十六願、大無量寿經の四十八願等と、六願の次第に増加したものと述べられて居るが、最初の般若の六度六願に就ては小品般若を以て之を証して居る。併しかゝる六度六願の意は、放光般若第三の問僧那品に

菩薩為衆生故起大誓願一言、我自當具足六波羅蜜、亦當下教他人具足六波羅蜜。(全八、二〇)

等と説けるに依て見らるゝ如く、これ四弘の総願に對すれば、別に六度を具足せしむる願なる故に、是等の文に依て六度六願の義を觀取することが出来る。未だ六度を以て判然別願と説ける文は見ないが、右の文は無辺度生の総願と異り、六度を具足せしむる誓願なる故に、総願に對して六度を以て六願と呼び得るのである。今且らく総願の四弘と

別願の六度とを比較するに、別願の六度即六願の精神は、総願の後の三句とその語は同一ではないが、その精神から見れば六度は四弘の後の三句の具体的別開と解することが出来る。即ち断煩惱、学法門、証仏道の三誓を、何れも六度と以て成就せんとせるものに外ならないのである。果して然りとすれば六度即ち六願は、四弘の後三句と同様、初句の無度生を成就せしむる所以の六願であり、随つて四弘に対して六度と見做さるゝに至つたものである。かゝる意を以てすれば華嚴の十度が、般若の六度を華嚴の十地に配せんがために、六度を更に方便行願智の十度に開いたものとすれば、明法品、十地品等に見ゆる供養、受持・転輪・二利・成熟・承事・浄土・不離・利益・正覚等の十願は、般若の六度六願と相通ずる別願といわなければならぬ。

右の中華嚴の十願は且く措き、他の別願は上述の如く般若の六願を中心として薬師の十二願乃至弥陀の四十八願と、六願が次第に累積せられたものである。就中七倍加の四十二願を説ける判然たる経文は、未だ見当らない様であるが、他の諸願からして、恐らく弥陀系統にあつたものかも知れない。何れにせよ上掲の諸願の中、般若の六願並に三十願等は、華嚴の十願と共に此土入証に属すべき願であり、これに対して弥陀の二十四乃至四十八願は、彼土入証の往生願と見なければならぬ。かくの如く諸經の別願は、一往此土他土入証の二類と見ることが出来る。

右二類中浄土系に就ては且く措き、今般若の六願は総願の具体的反覆と解されるが、更に般若には大般若の三百三十の初分願行品第五十一(全、六、二九)、並に大品第十七の夢行品五十八(全、八、三四)等には、六願の五倍加せられたる三十願を見るのである。且つかゝる三十願に就て見るに、最初の六願は六度六願と同じく六度を六願となし、第七願以下は六度を総括して各一願となし、同様の近一切種智の二十四願を加えて三十願とするのである。且つ近一切種智と説ける如く入証の願でなく、菩薩当分の専ら度生を主眼とする所謂無住涅槃の願たることは、大品の第三十願の最

後に

菩薩摩訶薩行ニ六波羅蜜ニ時、当作ニ是念、雖ニ生死道長衆生性多ニ、爾時心ニ如レ是正憶念ニ、生死辺如ニ虚空ニ衆生性  
辺亦如ニ虚空ニ、是中実無ニ生死往来ニ亦無ニ解脱者ニ。菩薩摩訶薩作ニ如是行ニ、能具ニ足六波羅蜜ニ近ニ一切種智ニ。

(全一八、三四)

等と説ける如く、かゝる三十願は要する法相の四種涅槃の中に、大智の故に生死に住せず、大悲の故に涅槃に住せざる、菩薩の無辺度生を目的とする無住涅槃の願に外ならないのである。

然らば華嚴の十願は果して如何というに、兩訳の世間成就品・十廻向品・就中新訳八十華嚴の十定品に就て見るに、上述の明法品十地品等の十願が

菩薩摩訶薩亦復如レ是、常勤修ニ習普賢行願ニ、成ニ就一切智慧光明ニ、住ニ於一切仏菩提法ニ、入ニ如来智ニ無レ有ニ障  
碍ニ。(全一〇、三三)

等と見ゆる如く、華嚴の十願の目的は右の文に明かなる如く普賢行願である。かくて華嚴に於てはかゝる普賢行願を、四十華嚴の入不思議解脱境界普賢行願品の最後、第四十卷に至つて

広修ニ十種広大行願ニ、何等為レ十、一者礼拝諸仏、二者称讚如来、三者広修供養、四者懺悔業障、五者随喜功德、  
六者請転法輪、七者請仏住世、八者常随仏学、九者恒順衆生、十者普皆廻向。(全二〇、四八)

等と十種の行願を説くが、十定品の普賢行願には智慧光明仏果成就の目的を掲げるが、右の四十華嚴の普賢行願を敷衍せる十願に就て見れば、初の五願は因位に於ける菩薩入信の願、後の五願は転輪・請仏・常随・恒順・廻向等は、願の内容より見れば般若の三十願と同様の、菩薩当分の無住涅槃の願といわなければならぬ。随つて般若華嚴も他の

諸大乘經と同じく、菩薩の漸修入証を説ける権大乘經であり、かゝる事實は上述の兩經の別願たる、六願十願三十願が無住涅槃を標榜するに徴して明である。これ古來天台が般若華嚴の諸大乘を悉く、法華經に対して菩薩乘教たる権大乘となし、独り法華經を以て超八醍醐の実經と稱揚する所以である。

### 三、般若法華の受持

上述の如く般若華嚴の別願は、共に無住涅槃を目的とするものであるが、更に諸般若經の屬累品に就て見るに、小品には受持（八、二五六）、大般若五七三（七、三六）、勝天王般若（八、五七）等には、諦聽・受持・披讀・諷誦・広説・書写・供養・思惟・修習・施他の所謂十種受持が具説せられ、他の放光・小品・仏母等には各六七八種の受持が見ゆるが、それ等の中六七八乃至十種は、般若諸經に見ゆる總の受持に対すれば別の受持であり、般若には是を綜合しての總の受持を見るのである。且つ般若諸經にはかゝる受持を、單なる般若の受持と説かずして深般若の受持と説き、若し大般若の三四六の初分囑累品には、かゝる受持を声聞の三十七品、乃至菩薩の十力・四無畏・十八不共法等に対して比三諸菩薩摩訶薩衆所住般若波羅蜜多最勝行住<sup>一</sup>、百分不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>一、千分不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>一、百千万分不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>一、乃至數分計分算分喩分、乃至鄢波殺曇分亦不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>一。（六、九七）等と校量し、更に最後に至<sup>レ</sup>て

我般若波羅蜜甚深經典付<sup>二</sup>囑於汝<sup>一</sup>、応正受持誦誦通利勿<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>忘失<sup>一</sup>。当<sup>レ</sup>知除<sup>二</sup>此般若波羅蜜多甚深經典<sup>一</sup>、受<sup>二</sup>持諸余我所說法<sup>一</sup>、設有<sup>二</sup>忘失<sup>一</sup>其罪猶小。若於<sup>二</sup>般若波羅蜜多甚深經典<sup>一</sup>、不善受持下至<sup>二</sup>一句<sup>一</sup>有<sup>二</sup>忘失<sup>一</sup>者其罪甚大。

（六、一七）

等とかゝる受持般若の諸行に勝るゝ所以を明にして居る。されば如上の校量より見て般若の受持が、般若当分の六度とは次元を殊にせる。勝行なることを知らなければならぬ。随つてかゝる受持は六度と次元を殊にせる点から見て、六度の別願の成就の要行たる受持と解さなければならぬ。

此に至つて受持の対照たる深般若とは果して何を指すかといえ、大論七二に依るに

般若波羅蜜中、或時分<sub>二</sub>別諸法空<sub>一</sub>是淺。或時說<sub>三</sub>世間法即同<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>是深。色等諸法即是佛法、聽者聞<sub>レ</sub>說心信<sub>二</sub>仏語<sub>一</sub>、自智慧不<sub>レ</sub>及故言<sub>三</sub>甚深<sub>一</sub>、譬如<sub>下</sub>河水有<sub>二</sub>洄復深処<sub>一</sub>有<sub>中</sub>淺処<sub>上</sub>。(二五、三五)

等と六度の対象の般若と、受持の対象の般若とを一往淺深の別と分つて居るが、然らばかゝる深般若とは果して何かというに、大論百に依れば

般若波羅蜜非<sub>二</sub>秘密法<sub>一</sub>、而法華等諸經說<sub>二</sub>阿羅漢受決作<sub>一</sub>仏、大菩薩能受持用、譬如<sub>三</sub>大藥師能以<sub>レ</sub>毒為<sub>二</sub>藥<sub>一</sub>。

(二五、四七五)

等と説けるに依れば、受持の対照たる深般若とは、世間法即涅槃、諸法即仏法と説く法華經を指したるものと解せられるのである。かゝる事實は法華經の中に五種法師を止揚し、就中分別功德品には『能持是經兼行布施』等と、受持に対して六度を以て助行となし、加之一念隨喜、一念信解等と受持を止揚せるに見れば、般若並に大論等に依れば深般若とは、一往法華を意味するものと解すべきである。

且つかゝる深般若の受持が三乗の諸行、就中般若の六度等に勝るゝ、換言すれば次元を殊にせる勝行なることは、法華の序品並に不輕品に依るに

為<sub>下</sub>求<sub>二</sub>聲聞<sub>一</sub>者說<sub>三</sub>三應四諦法<sub>一</sub>、度<sub>二</sub>生老病死<sub>一</sub>究<sub>二</sub>究竟涅槃<sub>一</sub>。為<sub>下</sub>求<sub>二</sub>辟支<sub>一</sub>者說<sub>三</sub>三應十二因緣法<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>諸菩薩<sub>一</sub>說<sub>二</sub>

応六波羅蜜二成一切種智。

等と三乘各別の諸行を連ねて、一往三乘当分の行果を説くも、法師品には

は大衆中乃至求三声聞二者。求三辟支仏二者。求三仏道者。如是等類咸於三仏前聞三法華經一偈一句、乃至一念隨喜者我皆授記

等と会三婦一の法華開会の一仏乗の行法として、般若の十種受持の要略たる五種法師、並に天台が文句に所謂『一念者時節最捉』と説ける如く、これ般若の総別兩願具足の上に、換言すれば般若の総の深般若の受持を、法華經に於ては会三婦一の要行たる一念隨喜、一念信解と説かれたものに外ならないのである。これ龍樹が大論五六に『信力故受、念力故持』(二五<sup>四六</sup>)と信受念持の二法と分ち、且つ大論に『仏法大論信為能入一智為能度』(二五<sup>五三</sup>)等説ける如く、受持を菩提心の根元たる信心の上に説いたのが法華經の一念信解である。併し乍ら信受の菩提心は念持に依て、始めて充足せらるゝが故に、見宝塔品には『此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸仏亦然』等と念持を強調し、『誰能護持』『若持此經』『若有能持、則持仏身』を始め、広く五種法師に寄せて『若自書持』『誦持此經』等と説き、就中本門の流通たる神力品の偈には『能持是經』等と五回反覆し、最後に『応受持斯經、是人於仏道、決定無有疑』等と結ばれたる所以である。右の如く般若の六度と受持との飛躍的経説は大論等に依て辛うじて理解し得るのである。

#### 四、普賢行願と会仏往生

上述の如く般若の六度と華嚴の十度を以て一往兩經当分の行法とすれば、華嚴の普賢行願は全經の別願たる十願の成果と見なければならぬ。而して華嚴に於ける普賢行願の經過に就ては、善財童子が五十五善知識を歴訪し最後一百

十一城を經過し、蘇摩那城に於て文殊菩薩の教示に依り、無数の法門、無辺の光明を具足し、十波羅蜜を得、普賢菩薩の身内に入り、無尽数の世界に行き一切衆生を教化し、普賢菩薩より如来の功德を成就すべき、十種の大行願たる普賢行願を授けられたのである。されば普賢行願は般若の六度に対する十種受持の如く、華嚴当分の行たる十度に対すれば、次元を殊にせる殊勝の行法である。これ四十華嚴の最後に

若復有人聞此願王一經於耳、所有功德比前功德、百分不及一、千分不及一、乃至優波尼沙陀分亦不及一。(10、六四)

等と校量のある所以である。併しかゝる普賢行願と般若の受持とは、共に兩經の総別兩願に酬いられたる行法ではあるが、普賢行願は十度より次元の上の行法ではあるが、般若の受持に対すれば更に次元下の行法といわなければならぬ。これ右の普賢行願校量の連文に

或復有人以深信心、於此大願受持誦誦、乃至書寫一四句偈、速能除滅五無間業。(10、六四)

等と華嚴の行願の受持が、除無間業と説けるに依て、般若の受持は華嚴の行願と次元を殊にせる、勝行と解さなければならぬ。

然るに中辺分別論下並に弁中辺論下(三、四六)等に依れば、權大乘当分の行正願傍の意に立って、般若の十種受持を以て華嚴の行法たる十波羅蜜の所攝となし、嘉祥は弁中弁論述記下に十度を以て妙慧証得の助行(四、三)と解し、三慧随伴の行となすことは、これ願に依て行の次元の殊を判せんとする、実大乘の行意を解せざるものといわなければならぬ。併し華嚴の普賢行願は菩薩当分の、六度十度等の修証の行法に対すれば、願行具足の次元を殊にせる勝行といわなければならぬ。併し般若の受持は更にこれに対すれば行願成就願行具足の勝行といわなければならぬ。妙樂

の所謂『教弥実位弥下』(四六、三五)等の語は、此の間の消息を物語るものといわなければならぬ。更に普賢行願は大日經の百字果相応品、並に觀智儀軌(一八、四〇、一九、六九)等にも見ゆるが、若し真言の乳味鈔一に依れば、『五悔亦名普賢行願』(一、四五)等と、五悔を以て普賢行願の要略となし、胎藏界の九方便に對する金剛界の懺悔礼仏法となし、真言行者の必須行願と説いて居る。又天台に於ては止觀の二の四種三昧と共に、止觀七には

若四種三昧修習方便通如上説一、唯法華懺別約三六時五悔一重作三方便一。(四六、九六)

等と矢張五悔を以て止觀の方便を説いて居る。これ先に嘉祥等が受持を以て十度の助行と判ずると、同行異曲の解といわなければならぬ。更に浄土鎮西派の顯意は觀經玄義分楷定記一に、善導疏の『願以三此功德一、平等施二一切一、同發三菩提心一、往三生安樂國一』(三七、七四)の文を解して

此偈中非三唯撰三成天親五念一、亦有レ撰三得普賢十願一。(仏全、五八、三〇)

等と天親の浄土論の五念門も亦五悔と同じく普賢行願と同一行法と解して居る。併し天台真言が普賢行願の要略たる五悔を以て正觀の助伴の行と解すると、浄土門に於て五念門の上に念仏往生を慕るとは、全くその行意を殊にせるものといわなければならぬ。

今かゝる浄土の五念門に就て見るに、善導は往生礼讚には五念門の上に念仏往生を説き、(四七、四七)更に慧心は往生要集に五念門に寄せて末代下根の易行として、往生之業念仏為本と正修念仏(四八、四七)を主張し、更に善導は觀經疏四の散善義に、五念門を觀經に依り誦誦・觀察・礼拜・称名・讚歎供養の五種正行の上に念仏往生を慕り、『順彼仏願故』(三七、三三)と弥陀の別願の上に称名を正定業となし、他の四行を助力と判じて後世の法然浄土教独立の礎地をなしたのであった。

かく見来れば般若の三十願、華嚴の十願、弥陀の二十四乃至四十八願等の所謂別願は、菩薩難修の因行を易修に置換すべき、媒介をなすものと解さなければならぬ。これ上掲善導の『順彼仏願故』の文に徴して明かである。更に慧心の往生要集に依れば、第五助念方法を明す総結行要の下、菩提心を以て往生の要と説き

業由願転故云三随願往生一、総而言之護三三業一是止善、称念仏一是行善、菩提心及願扶二助此二善一、故此等法為三往生要一。(全、九、九)

等と業由願転等と説くも、右の如く願を以て二善の扶助と解する故に、往生要集の念仏は矢張觀念の域を脱せざる所以である。かく見来れば願は行の難易浅深を規定する弥陀の護念と解さなければならぬ。即ち願は行の次元の高下浅深を判する鍵鑰といわなくてはならぬ。就中念仏往生は弥陀の別願と根拠として弥陀の五劫思惟を本因とし、不取正覚の文に十劫正覚の本果を摂取し、弥陀の摂取不捨の本因を本覚の意と解したものであろう。

由来本覚思想は動もすれば、存在即当為、煩惱即菩提と断じて、修行や倫理を否定せんとするのであるが、かゝる思想に対して始覚的行為を媒介として、宗教的生命を与えたのが我が鎌倉時代の仏教といはなければならぬ。法華經に於ける願に依る受持も全くそれに外ならないのである。

## 五、法華經に於ける願

然らば法華經には如何なる願があるかといふに、上述の如く菓草喩品の四種の広願の外、右の願の具現とも解すべき、譬喩品の『以三本願一故説三乘法』とも、人記品の『教化成就諸菩薩衆其本願如是』とも、勸持品の『時諸菩薩敬順仏意並欲自滿三本願』等に見ゆる如く、かく三乗の教化を以て悉く本願所行道と説いて居るが、これ譬喩品に

我今還欲令汝憶念本願所行道故、為三諸声聞一説三是大乘經名三妙法蓮華經教菩薩法仏所護念一

等と、爾前經に永不成仏とせられた声聞を止揚して、此經を以て本願所行道としての二乗作仏經なることを明にして居る。如之方便品の偈の諸仏章の下には

舍利弗当知、我本立誓願、欲令一切衆、如我等無異、如我昔所願、今昔已満足、化一切衆生、皆令入三仏道一

等と此經を以て一切衆生悉皆成仏の昔願成就の一仏乗教と説き。更に未來仏章の下には

諸仏本誓願、我所行仏道、普欲令衆生、亦同得此道、未來世諸仏、雖説三百十億、無數諸法門、其實為二乗一  
等と此經の本願所行の道は、三世益物の一仏乗教なる所以を明にして居る。

然らばこれに対する古来の註家は果して如何といふに、現存の法華最古の疏たる什門の道生は、法華經疏上に右の方便品の我本立誓願の説を以て、此經の一大事因縁を頌するものと為し、就中譬喩品の憶念本願の文を解して

以ニ本願ニ故説ニ三乘法ニ、三乗之化本為ニ濁世ニ、此土既淨不ニ容ニ有ニ三、而言ニ三者欲ニ明ニ五即是一ニ、其本解三即是一、故言レ以ニ本願ニ耳。(統藏乙、三套、四)

等と此經を以て本願所行道たる総願成就の一仏乗教なることを明にして居る。更に光宅寺法雲の法華義記二には

第三從舍利弗当知我本立誓願ニ有ニ兩行一、明ニ如来本行菩薩道時、欲レ与ニ大乘果一。(正藏、三、卷)

等と本誓願とは独り迹仏の本願と解せず、本門寿命品に依る本因成就の意を以てして居る。後に天台に至っては文句四下に、『我本立誓願』等の二行を『挙レ因勸レ信』と解し、更に

此亦為ニ初我本立誓願下一行挙ニ昔願一、二如我昔下一行明ニ願滿一、乃至我昔誓願非ニ自誓ニ菩提一、亦誓ニ衆生同

入ニ仏慧ニ、今酬レ誓故説是亦可レ信、今菩提既滿衆生亦入、汝既自証ニ仏慧ニ、亦驗ニ我誓不レ虚、結ニ成拳レ因勸ニ信也。(全、三、四、五)

等と此経を普願成就の経と解するのみならず、

問本誓既普今衆生尚多願云何滿。答仏三世益物今明ニ現在ニ論ニ願滿ニ也。(全上)

等と上掲未來仏章の意を以て、此経を以て三世益物願滿の経と解するのみならず、文句一には四釈を明す、第三の引証の下に右の我本立誓願の文を出して本迹釈の意と解し。就中第四示相の因縁釈の下には、『衆生久遠蒙ニ仏善巧ニ、令レ種ニ仏道因縁ニ、乃至雖レ未ニ是本門ニ取レ意説耳』(全、三、四、五)等と、仏の度生本願の具相として此経の上に、四節三益の説をなしたのである。

併し三論の嘉祥は法華義疏四に『如我昔所願』の文に就て

問如来初發心時願ニ一切成仏ニ、今並未ニ成仏ニ云何称ニ願已滿ニ耶。答靈山一会廻レ小入レ大、菩薩同入ニ一乘ニ、自レ爾已前令ニ直往菩薩授記作仏ニ、一期出世唯此二人令ニ作仏ニ、則一期願滿。(全、三、四、五)

等と此経の願滿を上掲三師とは別に、廻小入大と直往菩薩二人の上に説き、又法相の慈恩は法華玄贊四本に、矢張り右の文を解して

贊曰、此一頌令レ悟、汝応ニ如レ我悟ニ先所不レ知大乘真智ニ、我昔立誓願ニ令ニ一切衆生、与レ我無レ異願レ令レ悟故、願以ニ信欲勝解ニ為レ性。(全、三、四、五)

等と此経の一仏乘を以て慢然大乘真智と解するは、これ先の嘉祥と同行異曲の菩薩乘の意なることは明かである。これ古来上掲三師中就中法雲天台を四車家と呼び、後の嘉祥慈恩二師を三車家と呼ぶ所である。

## 六、法華經と總別二願

上述の如く諸大乘經には總別二願が見えるが、法華經には總願のみで別願はないのである。然るに法華真言勝劣事に依れば

私云無三二乘作仏者四弘誓願不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>満足一、四弘誓願不<sub>レ</sub>滿者又別願不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>滿、總別二願不<sub>レ</sub>滿者衆生之成仏難<sub>レ</sub>有歟。(定1、50)

等と述べらるゝに依れば、法華經にも別願がある如く思われるが、文中既に總願滿せずば別願を滿せず等ある如く、右の文は恐らく広く大乘諸經に亘り、願を以て大乘諸經の精神と解され、且つ一往諸大乘の兩願を認むるも、兩願の中には無辺度生の總願を以て根本願とせられたることは明かである。由來別願とは總願に對する別願なる故に、別願は總願と滿せんとする補助願と解すべきである。これ葉師の十二願や弥陀の諸願に見る如く、菩薩が万品の衆生の中特殊の機情に返せんとする、仏陀の大悲の象徴ともいふべき、光壽二無量を中心とする、特殊の願目の羅列とも見做さるゝのである。併し別願中その最初と目せらるゝ般若の六度即六願は、上述の如く總願の具體的別相とも解せられるが、葉師の十二願には三十二相、不墮惡趣、諸根具足、聞名除病。弥陀の諸願中には無三惡趣、悉皆金色、來迎引摂飲食自然等に見る如き、成仏得脱の如き人類究極の目的より、別願は特殊の満足乃至成仏得脱への道程とも見做るべき、換言すれば必須的總願を補成すべき、總願成就への助願と解せざるを得ないのである。これ聖人が『四弘誓願不<sub>レ</sub>滿者、又別願不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>滿』等と説かれたる所以である。されば別願は當然總願に統括せられるべきものであり、随つて別願なき法華經の如きは、總願に別願が統括せられたる經を解すべきである。これ經文に此經を以て本願所行道

と述べるゝ所以である。されば開目鈔には

釈迦諸仏の衆生無辺の総願は、皆此經にをいて満足す、今者已満足の文これなり。(定一、一五六)

とも亦

衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闍提、衆生と申すは九法界、衆生無辺誓願度此に満足す、我本立誓願乃至今者已満足云々。(全、一、〇五六)

とも、更に本尊鈔には如我無異の文を引き、『妙覺釈尊我等血肉也、因果功德非<sub>ニ</sub>骨隨<sub>ニ</sub>平』。(全、一、七)等と此經を以て本願所行道たる、無辺度生成就と經となす所以である。

併し乍ら上述の如く註家中法雲天台の如きは、此經の本願所行道を迹門当分の二乗作仏を超えて、本門の本因果果の上に説き、就中天台の如きは本門の意に依て四節の三益なす如きは、此經の二門開頭の上に本願所行道の全貌たる、三世益物の最も具体的説明と見なければならぬ。彼の天台の四節の三益が本門の本因果果に依ることは、四節の第一節に『衆生久遠蒙<sub>ニ</sub>仏善巧<sub>ニ</sub>、令<sub>レ</sub>種<sub>ニ</sub>仏道因果<sub>ニ</sub>』と説き、第二節に『復次久遠為<sub>レ</sub>種』等と説く故に、最初二節は上述の如く妙樂は本門の意といひ。妙樂は記一に

今經本迹二門施化並異<sub>ニ</sub>他經<sub>ニ</sub>、此文四節良有以也。故四節中唯初二節名<sub>ニ</sub>本眷屬<sub>ニ</sub>、乃至初之一節本因果種、乃至次下本因果種。(全、三四、六五)

等と此經の本願所行道を、方便品の本誓成就の意に寄せ、本門の五百塵点元初の本誓成就を、本因果種等と説けることは、全く寿量開頭の意に依るものといはなければならぬ。かゝる此經の本願所行道の根元たる、久遠の本因果種を以て後世此經の本覺の説となし、經にはかゝる久遠実成の本因果たる本覺の上に、此經の受持を説いて、『聞仏壽命

長遠如是乃至一念信解』と説き、かゝる一念信解の受持を五度と校量して

以ニ是功德ニ比ニ前功德、百分千分百万億分不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>其一、乃至算數譬喩所不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>知

等と説けるは、これ全く仏陀出世の本懐たる、毎自作是念の本願成就の本因果の受持なるがためである。されば右の五度とはこれ般若等の、権大乘の迹因たる菩薩の六度を指したものである。

これ宗祖が法華經の第三法門たる本門の意に立つて、本尊鈔に、『釈尊因行果徳二法、妙法蓮華經五字具足』等と寿量の久遠の本因果を以て妙法五字となし、且つかゝる妙法を以て神力品に於ける、本化別付の要法と解された所以である。されば当体義鈔には

久遠実成釈迦如来、如我昔所願、今者已満足、化一切衆生、皆令入仏道御願已滿也。如来滅後後五百歳中広宣流布付属為<sub>レ</sub>説。地涌菩薩召出、本門当体蓮華以<sub>レ</sub>要付属給文。釈迦出世本懐道場所得秘法、末法我等成<sub>ニ</sub>就現当二世一、当体蓮華誠証此文也。(定一、二七六)

等と説き、且つかゝる久遠下種の本因果と、末法下種の妙法五字とは、起信論等の真如本覚や、天台の一念三千の理本覚と異なることは、寿量品に『慧光照無量、寿命無數劫、久遠業所得』等と、仏陀の実修実証の体験即ち本因本果の価値としての本覚なることを明に説き、更に日向記には

蓮華者本因本果也。此本因本果云一念三千也。本有因本有果也。今始めたる非<sub>ニ</sub>因果<sub>一</sub>也。五百塵点法門事と説かれたり、乃至此経奉持時を本因とす。其本因儘成仏云本果云也、日蓮弟子檀那肝要本因を宗とする也。

(定三、二四五)

等と説けるに依て明かである。併し勝劣派に説く如き因勝果劣の論でないことも亦明かである。されば右の意を要約

するに、方便品の我本立誓願とは仏陀久遠元初の無辺度生の総願であり、その具体的経説が譬喩品に所謂本願所行道たる、寿命品の開願といはなければならぬ。併し宗祖は遣使還者の末法の導師なる故に、本尊鈔に法華一部末法為正の説をなし、

在世本門末法之初一同純円也、但彼脱此種也。彼一品二半此但題目五字也、(定二、五六)

等と在末種脱の別を明かにするも、一品二半も妙法五字も共に寿命開願の法門なる故に、且く本門正宗の一品二半に寄せて、他の一代諸経を悉く小邪末覆と判じ、『爾前迹門円教尚非弘因』等と更に天台の弘通を批判せらる所以である。

## 七、菩薩の総願と受持読与

我等は先に菩薩の因行たる六度は、総願たる四弘の初句たる無辺度生を成就する所以の、自度の行願の具体的別相と述べたが、このことは上掲放光般若の問僧那品に

菩薩為衆生三故起三誓願二言、我身当具足六波羅蜜二、亦当教他人一具足六波羅蜜一(正蔵八二〇)

等と見ゆる徴して明かである。而し般若当分の説としては六度を以て六願とすれば、かゝる般若の別願に酬いられたのが、三十願の証果たる無住涅槃であり、又華嚴の別願たる十願の上に成就せられたのが普賢行願といはなければならぬ。

併し本願所行道たる法華経には、かゝる菩薩の総願として方便品の如我者所願の文を挙げて

諸大菩薩諸天等此法門をきひて、領解云『我等從昔來、數聞世尊説一、未嘗聞中如是、深妙之上法』等云々、

乃至未曾聞如是深妙之上法謂、未聞<sub>三</sub>法華經唯一仏乗教<sub>二</sub>也等云々、華嚴方等般若深密大日等の恒河沙の諸大乘經は、いまだ一代肝心たる一念三千大綱骨髄たる、二乗作仏久遠実成等いまだきかずと領解せり。(定一、〇七)

等と、菩薩の本願は極大乘諸經の如く菩薩乘当分の説に留らずして、此經に於ける二門の開頭にありとなし、更に全鈔には事の一念三千たる題目の法体を説くに當つて、方便品の『欲聞具足道』、涅槃經の『薩者名具足義』(文字品、正藏二、四四)均正の四論玄義記の『沙者訳云レ六、胡法以レ六為<sub>二</sub>具足義<sub>一</sub>』(十卷、現に統藏二、四七、一に、一三四の三卷を欠く七卷を收むるも、現行本中には本文なし)吉藏の疏『妙者翻為<sub>二</sub>具足<sub>一</sub>』(法華遊意、正藏三、四、九六)天台の玄義八の『薩者梵語此翻<sub>レ</sub>妙』(正藏、三、五七)、龍樹の大論四八の『薩者六也』(正藏、五、八〇)の二經一論三釈の文を挙げ、妙者具足、六者六度万行、諸の菩薩六度万行を具足するようをきかんとをもう(定一、九六)等と、題目を以て極大乘諸經の如く単に因行と解せずして、註家中道生法雲天台等の如く、菩薩の六度万行成就の本因本果具足の法体を解し、更に本尊鈔に至つては、右の開目鈔の六文を引くに先つて、無量義經十功德品に五種法師に依る如説修行を説ける。『雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>修行六波羅密<sub>一</sub>、六波羅密自然在前』の文を引き、再び開目鈔の二經一論三釈の七文を連ね、

私加<sub>三</sub>云通<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>贖<sub>レ</sub>文、雖<sub>レ</sub>然文心者、釈尊因行果德<sub>二</sub>法妙法蓮華經<sub>一</sub>五字具足、我等受<sub>三</sub>持<sub>二</sub>此五字<sub>一</sub>、自然讓<sub>二</sub>与<sub>レ</sub>彼因果功德<sub>一</sub>。(定一、七二)

等と、上述の般若經に於ける深般若の受持の意に依り、本願所行道たる此經の本因本果を、釈迦の久遠実成の本因本果の功德聚たる妙法受持と、般若經の總願六度受持を飛躍的に此經の本門一念信解の受持の上に説かれたのであった。これ般若当分の六度とは全く次元を異にせる、般若の深般若の受持を以て、本願所行道たる此經の受持の意を明

ものといはなければならぬ。

さればかゝる飛躍的受持讓与の説は、これ般若に於ける深般若の受持を、上掲大論七二の淺深般若並に百の法華經の受持作仏等の文に見る如く、法華經を以て般若中の深般若と解し、且つ大論の意に依れば般若經の上に、二乗作仏を本願所行道たる深般若として、法華經の成立を見たものといはなければならぬ。上述の如く般若經当分の淺般若に於ては、六願乃至三十願の別願を以てしても、菩薩地に於ける無住涅槃に留つたのが、本願成就の法華經に於ては六度等とは次元を異にせる、深般若の受持としての一念佛解が説かれ、妙樂は文句記十に『一念佛解者即是本門立行之首』(正藏二四、三)等と六即名字入信の位と説くも、四信五品鈔には

現在四信之初一念佛解、与滅後五品第一初隨喜二此二处、一同百界千如一念三千宝篋十方三世諸仏出門也。乃至制止檀戒等五度一向令称南無妙法蓮華經、為一念佛解初隨喜之氣分也、是則此經本意也。(定二、九三)

等と此經の一念佛解の受持を説かれ、更に總勘文鈔には天台等の修証の六即五十二位等に簡んで、『名字即位即身成仏、故円頓教無三次位次第二』(定三、三)等と、上掲の開本兩鈔と相表裏して、此經の本願所行道たる以信代慧の行意を明にせられたのである。

されば御義口伝上には方便品の、『如我等無異、如我昔所願』の文を、『釈尊惣別二願者、為我等衆生所立願也』等と、一往諸經の總別二願の意と解し、再往此經の本願所行道の上に

南無妙法蓮華經を指して『今者已満足』と説かれたりと可意得也。されば此の『如我昔所願』の文肝要也。

『如我昔所願』は本因妙、『如我等無異』は本果妙也。乃至今日蓮が唱る処の南無妙法蓮華經は、末法一万年の衆生まで令成仏也、豈非今者已満足乎。(定三、三六)

等と、如我昔所願を寿量品の『我本行菩薩道』の本因、今者已満足を『然我実成仏已來』の本果の意を以て解し、此經の本願所行道を本因本果の事の一念三千の妙法、經に所謂『慧光照無量、壽命無數劫、久修業所得』を、当体義鈔には『本門当体蓮華、道場所得秘法』と解し、本尊鈔には『因行果徳受持讓与』、四信五品鈔には『以信代慧、此經本意』等と説かれたのが、末法広布の神力別付の妙法である。然るに修禪寺沢には

釈迦如来五百大願中、第五十二云我有<sub>二</sub>微妙法<sub>一</sub>、若有<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>至心受持速成<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>第二生<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>生死身<sub>一</sub>、若不<sub>レ</sub>爾者不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>正覺<sub>一</sub>。(全三、五六)

等と、此經の受持を悲華經の釈迦五百の大願に立ち、且つ弥陀別願の不取正覺に倣つて解する如きは、全く此經の本願所行道を曲解せるものである。

加之古註家中此經を以て釈迦出世本懷の一仏乗教と解せる天台も、文句十上には分別品の在滅流通を四信五品と説き刺さへ一念信解、乃至兼行五度、正行六度(正藏高、<sub>三</sub>)等と、權大乘たる般若華嚴の六度の別相たる止觀の上に、從淺至深、從因至果の理觀の六即五十二位に寄せて説けるは、これ宗祖が天台の弘通を去曆昨食等と貶せられる所以である。されば宗祖は本尊鈔には受持讓与、報恩鈔には有智無智一同の信証の易行、四信五品鈔には以信代慧、總勘文鈔には無次位の妙法等と説かるゝ所以である。就中本尊鈔には先づ摩訶止觀の一念三千を挙げ、第二十番問答に至つて上述の如く三經一論三釈の文を挙げ『私加<sub>二</sub>会理<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>驢<sub>二</sub>文<sub>一</sub>』と理觀を事觀に會して受持讓与の釈を見た所以である。さればかゝる六度乃至五種頓修の受持讓与の釈は、全く仏教の行法より見て飛躍的要行をいわなければならぬ。随つて右の三經一論三釈の文は、全く上述の如き華嚴の普賢行願、般若の十種受持、此經の五種法師等を飛躍せる所以を説かれたる所謂五種頓修の受持讓与で、これ念仏往生か普賢行願の要略たる、五念門の上に説かれたる等に比し

て同致ではないのである。これ宗祖がかゝる飛躍を寿命品の本因本果、即ち久修行所得の妙法を本覚思想の上に説かれて、自ら第三法門、本面迹裏事の一念三千、神力付囑の真浄大法を説かれたのであった。

(三四、三、一二)

▼…引 証 書 目…▲

法 華 經

大正大藏經(正藏) (全又は単に數字)

大 日 本 統 藏 經 (統 藏)

大 日 本 仏 教 全 書 (仏 全)

昭 和 定 本 日 蓮 聖 人 遺 文 (定)

真 言 乳 味 鈔